

volume
117

June
2011

HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

Yada 52-1, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526 Japan

inside NEWS



開学記念行事 運動会選手宣誓

CONTENTS

入学式.....	1	大学準硬式野球連盟 中国遠征試合	16
学位記授与式.....	2	第1回 おとこの料理教室.....	17
平成23年度開学記念行事開催	3	薬学部カレッジホールにショーケースを寄贈	17
薬学市民講演会「健康な高齢化社会の実現に向けて」を開催	5	活躍する卒業生・修了生	18
臨時安全講習会「理系研究室の安全対策について」.....	5	教員人事・客員教授の紹介	20
平成22年度産学共同研究成果発表会への参加	6	卒業生の就職状況.....	21
第6回薬学講座が開催	6	はばたき寄金からのお知らせ	21
文部科学省委託事業(GP)の成果	7	図書館だより	22
受賞.....	8	東日本大震災の被災地支援に向けて.....	25
海外留学体験記.....	10	東北地方出身者の集まり	25
留学生スキー合宿.....	13	東日本大震災被災地支援緊急報告会.....	26
キナバル山紀行.....	14	県大生ピックアップ!	27
第36回静岡岡駿府マラソンに参加して	15	静岡県立美術館から展覧会のお知らせ	27

入学式

学部・短期大学部・大学院入学式



新入生を代表して誓いのことばを述べる
食品栄養科学部の土屋祐介さん

4月8日（金）、静岡市駿河区池田のグランシップにおいて、学部・短期大学部・大学院合同の入学式が行われ、今年度は学部生 566 名、大学院生 164 名、短期大学生 231 名、合計 961 名の新入生がそれぞれの決意を胸に新たなスタートを切りました。

新入生を代表して誓いの言葉を述べる食品栄養科学部の土屋祐介さんは「将来、食品開発の仕事に携わるべく、幅広い知識を身に付け、さまざまな課題の解決に挑戦したい」と誓いの言葉を述べました。



新生活への期待を胸に笑顔の新入生



式典終了後に行われた学長 1 時限目の授業

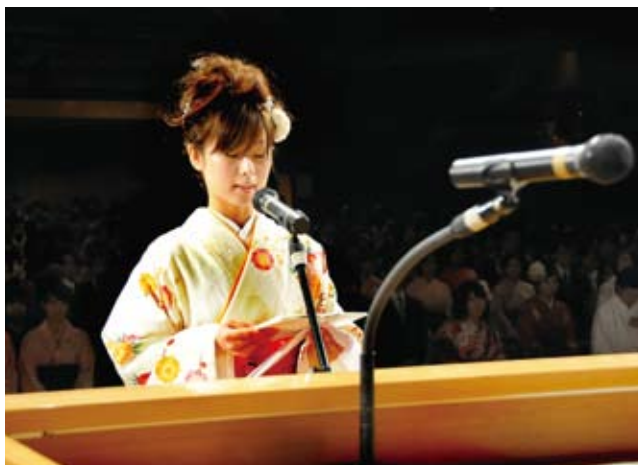


式典終了後のクラブ紹介（ジャズダンス部）



式典終了後のクラブ紹介（アカペラ部）

ご卒業おめでとうございます。 学位記授与式



卒業生を代表して答辞を述べる看護学部 of 仁尾真弓さん

た方々との出会いに感謝し、本学で学んだことを活かし、努力し続けていきたい」と決意を述べました。会場の入り口では短期大学部のボランティアサークルが東日本大震災の募金活動を行いました。



みんなで記念撮影



祝

3月22日火曜日、静岡市駿河区池田のグランシップで、学部・大学院、短期大学部の合同学位記授与式が行われ、5学部462人、短期大学部222人、大学院209人がそれぞれの新たな道への一步を踏み出しました。卒業生を代表して看護学部の仁尾真弓さんが大學生生活を振り返り、「支えあった仲間とお世話になっ



学位記授与



胴上げで祝福を受ける卒業生。おめでとう！



東日本大震災被災者のための募金活動も行われました

創立25周年 平成23年度開学記念行事開催

今年で20回目となる開学記念行事が4月20日（水）に開催されました。

第1部の「運動会」は、清々しい晴天の下、本学グラウンドで赤、青、緑、黄色の4グループに分かれて、優勝を目指して激しい得点争いが繰り広げられました。参加人数は、雨天のため体育館で実施された昨年と比べて1.5倍強と大幅に増加しました。特に、例年参加が低調であった教職員の積極的な参加も目立ち、学生・教職員がスポーツを通じて大いに交流を深めました。



第1部運動会 選手宣誓



障害物競走



綱引き



玉入れ

第2部のシンポジウムは、本学の創立25周年記念事業のスタートイベントに位置付けられ、「25th anniversaryー今までとこれからー」をテーマに開催されました。木苗学長から本学の歴史紹介や更なる発展への決意が述べられた後、川勝静岡県知事の特別講演では、地域社会の発展に役立つ学生になって欲しいこと、被災時における支援貢献など本学への期待について熱く語られました。また、竹内静岡県公立大学法人理事長から「学生気質の今昔」と題して、今では考えられないような自らの学生時代の苦難やエピソードについて特別講演がありました。

パネルディスカッションでは、本学卒業生から学生時代を振り返ってのお話があった後、在学学生から先輩への質問や卒業生から後輩へのアドバイスなど活発なトークが展開されました。



第2部 木苗学長の講演



川勝静岡県知事の特別講演



パネルディスカッション



竹内理事長の特別講演

第3部の「はばたきのつどい(懇親会)」は、多数の学生、教職員の参加により学生ホール・食堂で開催されました。

学長の挨拶に引き続き、「おとり会賞」の表彰が行われ、今年は平成22年度輝かしい成績を収めた「男子サッカー部」が表彰されました。また、第1部運動会の表彰やジャズダンス部、チアリーダー(GOLD ROWDIES)によるアトラクションが披露され大変盛り上がりしました。

区分別の参加者数は、下表のとおりです。

●開学記念行事参加者数 (H23.4.20)

	区 分	第1部 運動会	第2部 シンポジウム	第3部 はばたきの集い
教員 職員	薬学部・薬学研究科	5	64	80
	食品栄養科学部・生活健康科学研究科	12	36	40
	国際関係学部・国際関係学研究科	1	39	43
	経営情報学部・経営情報イノベーション研究科	1	19	30
	看護学部・看護学研究科	2	28	29
	環境科学研究所	1	22	25
	事務局・図書館	13	29	10
	当日券			10
学生	学部生、院生、研究生	140	368	258
その他	一般、報道関係者等		8	
	総 計	175	613	525

第3部参加者数は、参加券の販売枚数による



運動会優勝チームに贈られたケーキ



チアリーダー GOLD ROWDIES によるアトラクション

日本薬学会、静岡県立大学、グローバルCOEプログラム共催 薬学市民講演会「健康な高齢化社会の実現に向けて」を開催

薬学部・薬学研究科 教授 野口博司

3月28日から31日に予定されていた日本薬学会第131年会静岡大会は、東日本大震災の影響により中止されましたが、併催事業として企画された薬学市民講演会については、急遽「災害への危機管理に向けた医薬品の利用への理解」というテーマを盛り込み、予定通り3月27日（日）に静岡市商工会議所で開催されました。

冒頭、奥直人薬学部長・年会組織委員長と木苗学長がこの市民講演会の意義について挨拶しました。講演では、資生堂ヘルスケア事業部学術統括主幹の渡部一夫氏が若々しい皮膚を保つ秘訣が体内外、両面のケアにあることや、化粧品中の有効成分や食品中の機能性成分について分かり易く解説されました。また、東京大学大学院情報学環・薬学研究科の澤田康文教授は、災害時でも自分の病歴や服用中の薬を医師に示せるように患者自身が備えておくことの大切さや、薬と食の相互作用

（何が起こり・なぜ起こり・どう回避するか）等について熱弁を振るわれました。最後に今井康之グローバルCOEプログラム拠点リーダーが、大学の研究を分かり易く社会に説明する大切さと参加者への謝辞を述べて講演会を終了しました。

計画停電等の影響により公共交通機関が乱れる中、県内各地から集まった350余名の参加者にとって有意義な講演会となりました。



講演される澤田先生と熱心な参加者

臨時安全講習会「理系研究室の安全対策について」が開かれました

5月23日に3月の東日本大震災の発生を受け、臨時安全講習会が開催されました。安全衛生委員である薬学部の赤井周司教授が「理系研究室の安全対策について」という内容で講演し、高圧ガス・液化ガス・化学薬品の取り扱い方や研究室の地震対策について、実際の事故例も交えて紹介しました。今回の震災で被害を受けた大学実験室の例も示され、聴講生たちは地震規模の大きさに圧倒されました。講演後には質疑応答という形で、今後の大学での安全対策・地震対策をどうすべきかについて活発な議論がなされ、また木苗学長からもいくつかの重要な提案がなされました。近い将来に発生が予想されている東海地震に向けて、聴講生一同が、これまで以上に安全・防災対策に力を入れる必要性を感じたものと思われます。なお、講習会は遠隔講義システムにより、短期大学部へも映像配信されました。



講演する赤井教授

平成22年度産学共同研究成果発表会への参加

3月16日（水）、静岡市産学交流センター主催の「平成22年度産学共同研究成果発表会」が、同センターで開催されました。

この共同研究は、静岡市の支援を受けて地域の企業が抱える身近な課題について大学と企業が共同で研究を行うもので、平成22年度は本学と地域企業との間で5件の取組がありました。

発表会の後には、研究成果（試作品など）の展示・交流会も行われ、本学との共同研究が地域企業の皆様の新たな事業展開に役立っていくものと期待しています。

《課題テーマと教員》

課題テーマ	教 員
やぶ北茶を利用した新機能性食品の開発	薬学部 准教授 竹元万壽美
米ペーストを用いた新食感の魚肉練り製品の開発と商品化	食品栄養科学部 名誉教授 貝沼やす子
静岡におけるエリアワンセグを活用したデジタルサイネージの効果調査	経営情報学部 教授 岩崎邦彦
21世紀型 新静岡流通センター構想	経営情報学部 准教授 森田克徳
マイクロバブルとオゾンを利用した新しい野菜洗浄・殺菌装置の開発	環境科学研究所 教授 坂口真人



発表会の様子



展示・交流会の様子

第6回薬学講座が開催されました

薬学研究の第一線で活躍されている研究者による「第6回薬学講座」が4月27日に谷田キャンパス大講堂で開催されました。協和発酵（当時）で抗ヒスタミン薬「アレロック」を開発した大森健守博士（横浜薬科大学教授）、三共株式会社（当時）で高脂血症治療薬スタチン類を発見した遠藤章博士（バイオフาร์ม研究所所長）をお招きし、大ヒット医薬品の発見・開発に至る経緯や研究哲学を話して頂きました。また講演会終了後には、数十人の学生と両博士との交流会が催され、企業での研究に関する学生からの質問に、両博士とも熱心に応じておられました。終了後には両博士から、本学の学生の積極性や向学心に感じ入った、とのお言葉を頂きました。両博士に刺激されて、これから、本学からも、創薬研究者が続出するものと期待されます。



大森健守博士



遠藤章博士

文部科学省委託事業(GP)の成果

ーHPSに係る活動報告ー

ホスピタル・プレイ・スペシャリスト養成責任者 松平千佳

HPS 養成講座第6クールは、28名応募中13名(現職者7名、離職者6名)を選出しました。11月30日に開講式を行い、遠くは関西からウィークリーマンションを借りての受講者も多くいました。



開講式の様子

前回の講座と異なる点は、前期・後期の2期制にしたことです。これはHPSに求められる振返りの学びを深めるためです。前期は1週間の講義の後、1週間の実習が行われました。実習後には、後期までに取り組む課題を示します。受講生は、ヘルス



エデュケーションボードの作成

エデュケーションボードの作成か、プレイ・プログラムの立案・実行・振返りの何れかに取り組まなくてはなりません。

2月14日からの後期第1週は、英国から招聘したHPS フランシス氏の講義です。受講生は様々なディスカッションを通し、HPSの専門的な知識や技能について学びを深めます。多くのレフレクション(反省)を要求されるため、亡くなった子どもや上手に薬を飲ませられなかった子どもを思い出しては辛くなり涙したりすることもありました。

後期実習は2週間です。実際にプレイ・プログラムを立て、病児を対象にそのプログラムを実施するという課題が設定されました。プレイ・プレパレーションやデストラクションなど、受講生はHPSの技術にも挑戦しました。

3月16日、17日の口頭試問を終え、11名が修了式に臨みました。それぞれ病院で新たな挑戦が始まっています。子どもにやさしい医療を実現するた

めのチャレンジは、これからも続いて行きます。

また2月19日(土)には、短期大学部講堂において静岡県立病院機構様と静岡県社会福祉協議会様及び静岡市社会福祉協議会様の後援により「HPS セミナー & ワークショップ」を開催しました。当日は「遊びの持つチカラと価値を語ろう! - すべてのこどものために、すべてはこどものために -」と題し、本学修了生であるHPSの活動報告や英国HPSのフランシス講師によるワークショップを展開し、約120人が来場しました。

プログラムの冒頭、木苗学長が「遊びを感覚としてだけで捉えるのではなく、実際に体験することでその価値を実感して頂きたい」と挨拶された通り、HPSは身近にある遊びを紹介し、子どもにやさしい医療を提供するために具体的な方法を用いて優れた実践をしていることが分かりました。なお、当日はHPSによる事例集を配布し、遊びの持つ可能性を多くの方に一層ご理解頂くことができました。

ワークショップでは、参加者は手作りのマスクを作成し、実際にマスクを通して交流を図りました。参加者からは「新鮮だった」「今後参考としたい」との声が寄せられ、簡単な材料と少しの工夫で自分の感情が相手へと伝わることに驚いた様子でした。

今回のセミナー & ワークショップでは、医療関係者だけでなく、福祉や医療に関心を持つ一般参加者も多数おり、本学のホスピタル・プレイ活動に対する社会的な関心の高まりを伺うことが出来ました。



HPSによる実践報告の様子

HPS(ホスピタル・プレイ・スペシャリスト)とは、英国で誕生した病児や障害児を支援する専門職です。本学は日本で初のHPS養成教育を実施しています。

受賞

日本年金学会創立30周年記念賞(佳作)を受賞

経営情報学部の上野雄史助教は、1月20日(木)、日本年金学会創立30周年記念賞(佳作)を受賞しました。

この賞は、論文査読制度に基づき投稿された論文のうち優秀作の執筆者に対して授与されるもので、上野助教の受賞論文名は「退職給付債務の測定概念に関する考察」です。

本賞の表彰式は今秋(10月末頃予定)開催される第31回日本年金学会総会の席上にて行われます。

第32回沖縄研究奨励賞を受賞

食品栄養科学部の熊澤茂則教授は、1月27日、第32回(平成22年度)沖縄研究奨励賞を受賞しました。この賞は、沖縄の地域振興及び学術振興に貢献した人又はグループに対して贈られるものです。今回、自然科学部門において「オオバギ研究チーム」が選ばれました。この研究チームの代表は熊澤教授で、他のメンバーは伊藤俊輔氏(沖縄県森林資源研究センター)と福本修一氏(株式会社ポッカコーポレーション)です。受賞対象研究題目は「沖縄の未利用樹木オオバギの素材化に向けた研究と開発」です。沖縄産のミツバチ産物プロポリスの起源植物として発見したオオバギから高い抗酸化および抗菌活性を持つ有用成分を見出し、オオバギの栽培法と工業レベルでの生産技術を確立したことが評価されました。



平成23年度日本薬学会奨励賞を受賞

薬学部医薬生命化学分野の浅井知浩講師は、3月28日に日本薬学会第131年会において、平成23年度日本薬学会奨励賞を受賞しました。同賞は、薬学の基礎および応用に関し、独創的な研究業績をあげつつあり、薬学の将来を担うことが期待される研究者に授与される賞です。浅井講師には、日本薬学会の西島正弘会頭から表彰楯と副賞が授与されました。今年度は、化学系、物理系、生物系、医療系の4部門をあわせて8名の受賞者が選ばれました。受賞の対象となった研究テーマは、「リポソーム DDS による腫瘍新生血管傷害療法に関する研究」で、がん細胞の増殖や転移に深く関与する新生血管へと薬物や核酸をデリバリーする斬新なテクノロジーを開発し、世界に先駆けて独創的な研究成果を報告してきました。本研究成果は、治療効果が高く副作用が少ない画期的な抗がん剤の開発に繋がると期待されます。



本学のホスピタル・プレイ・スペシャリスト養成活動がこども環境学会の活動奨励賞を受賞

3月15日、「小児医療におけるホスピタル・プレイ活動について」が、こども環境学会賞の活動奨励賞に選ばれ、松平千佳准教授が表彰されました。

「入院する子どもたちに暖かな風を送るものとして注目したい。子どもをどんな時も「遊び」から遠ざけてはならない。なぜなら、子どもは遊びを通して学び、育ち、人とつながっていくからである。遊ぶなかで見せる笑顔は大人を癒し、何より笑うことはお互いの自然治癒力を高めることにもなるだろう。病院内におけるこども環境をよりよいものにしていくため、この養成講座に大きな期待を寄せたい。」との講評を受けました。

受賞

情報処理学会第73回全国大会で 学生奨励賞を受賞

経営情報学研究科修士課程2年の伏見卓恭さんは、3月2日（水）～4日（金）に東京工業大学で開催された情報処理学会第73回全国大会において、学生奨励賞を受賞しました。本賞は、学生セッションで発表された中から優秀な発表に対して贈られるものです。

論文名：「社会ネットワークにおける中心性の定量的な頑健性評価法の提案」

著者：伏見卓恭、斉藤和巳、武藤伸明、池田哲夫

D2Cコンテスト「Device2Cloud コンテスト 2011」クラウド原石賞を受賞

第1回学生向け組み込みアプリケーション開発コンテスト D2C コンテスト「Device2Cloud コンテスト 2011」の決勝大会に進出していた、経営情報学部基礎演習1年生のグループが『クラウド原石賞』を受賞しました。

作品名：勤務シフト管理システム

チーム名：the tissue

登録メンバー(3名)：八木田知弘(1年生)、中北惇介(1年生)、石井千詩(1年生)

助言メンバー：鍋田真一(3年生)、岡本竜(4年生)

指導教員：大久保誠也助教、湯瀬裕昭准教授、鈴木直義教授

第26回茶学術研究会口演発表の部奨励賞を受賞

薬学研究科博士後期課程1年の松本圭司さんは、3月9日に開催された第26回茶学術研究会講演発表の部で、奨励賞を受賞しました。この賞は、口演



発表の中で特に研究内容が優れている、35歳以下の若手研究者に贈られるものです。なお本研究の内容は国際誌「BMC

Complement Altern Med」web版にも掲載されました。

発表演題：「緑茶成分の経口摂取によるインフルエンザ予防効果の検討：成人ボランティアを対象としたランダム化二重盲検比較試験」

○松本圭司、山田 浩、田熊規方ほか

第12回静岡ライフサイエンスシンポジウムポスター賞・第26回茶学術研究会ポスター賞を受賞

薬学部生物薬品化学教室 修士2年生の前田健一さんと宮崎英明さんが、3月4日に本学で開催された第12回静岡ライフサイエンスシンポジウムで、藤谷圭佑さんが3月9日に静岡で開催された第26回茶学術研究会でそれぞれポスター賞を受賞しました。これらの賞は優秀なポスター発表を行った学生または若い研究者に授与されるものです。

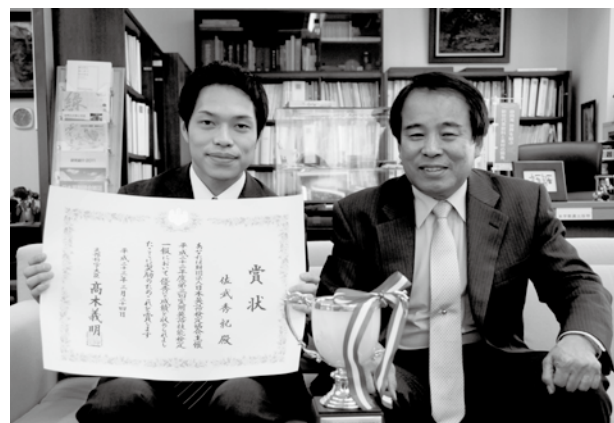
3人は大学院修士課程の2年間に生物薬品化学教室で行った研究成果をまとめ、下記のようなタイトルでそれぞれポスター発表を行いました。

前田健一：「高脂肪食摂取による脳の老化促進に対する緑茶成分の抑制作用」

宮崎英明：「高脂肪食摂取による膵β細胞の加齢変化と緑茶成分による予防効果」

英検1級で「文部科学大臣奨励賞」を受賞

薬学部創剤科学分野6年生の佐武秀紀さんは、2010年に開催された第3回実用英語技能検定1級において、優秀な成績を収め、「文部科学大臣奨励賞」を受賞しました。この賞は、全3回（総受験者230万名）の中から各回トップの成績優秀者（全3名）に与えられる非常に栄誉ある賞です。



海外留学体験記 01

ードイツ ブレーメン州立経済工科大学ー

国際関係学部4年 得田詩乃

私は2010年9月から1セメスター間、ブレーメン州立経済工科大学（Hochschule Bremen）で学んできました。ブレーメンは、歴史的な建造物が残る美しい街であると同時に、街中にトラムやバスが走り、「コンパクトで便利な都市」というイメージを最初に抱きました。

大学での生活

日本人留学生はAWSというコースに所属します。新学期は10月から始まりますが、その前に留学生用の語学授業を受けました。長丁場、かつ、話すことに重点が置かれているので、ついていくのはとても苦労しました。授業、は幾つかの項目から自分で選択することができ、ドイツ語と英語のどちらかで行われます。大半が少人数制であるため、教師との距離が近く、学生が活発に発言、議論する姿にはとても刺激を受けました。私が受けていた「異文化コミュニケーション」という授業では、プレゼンテーションやディスカッションといったグループワークが主でした。そのため、机上では得られない実践的な経験を積むことができましたし、多様な文化に接することは、貴重な体験となりました。Hochschule では、1年間の海外留学が全員に義務付けられているそうです。「European Management」では、帰国した学生が多く参加し、その体験談はとても興味深いものでした。日本ではあまり感じることもない「多様な人々が混在するチーム」の中でいかに成果を上げるか、という内容でした。夕方からは、語学の授業やクラブに参加することができました。プログラムは豊富にあり、武道もあります。また、学内イベントも頻繁に開催されていました。その中でも、留学生が自国について紹介する International Day では数十カ国のブースが立ち並び、本場の料理やダンスを堪能することができました。一方で私自身は自文化の紹介を通し、日本に対する知識不足を改めて実感しました。

学びの多い日常

住居は、ホームステイでしたが、キッチンやバスルームは専用のものがありました。ホストファミリーにはとても親切にしてもらい、夕食やホームパーティなども一緒に楽しみました。現地の生活に入ることは、言語以上に収穫のある体験でした。

休日には、毎週のように友人と出掛けていました。Semesterticket（定期券）で州内の交通機関と近郊



ブレーメンの街並み

都市までは、ドイツバーンを使って自由に移動でき、ハンブルグには何度か訪れました。また、ドイツは多くの国に囲まれ、他国へも国内旅行のような気軽さで行くことが出来ます。自由な国境移動はEUならではであり、不思議な感覚です。

滞在中にドイツ統一20周年式典が偶然にもブレーメンで開催されたことは、印象的な出来事でした。その他、クリスマスマーケットなど行事が多いことも楽しみの一つです。

最後に

4か月という短い期間でしたが、毎日が新鮮でたくさんのことを学ぶことが出来ました。この留学を通じ身につけたことを、今後も存分に活かしていきたいと思います。また、今回このような素晴らしい機会を与えて頂いたこと、留学に当たりお世話になった方々にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



International Day にて



海外留学体験記 02 ーフィリピン フィリピン大学ー

国際関係学部3年 中村朝美

私の通った大学は、フィリピンでも名のある大学「University of the Philippines」(UP)である。そんな歴史ある大学で学ばせていただいたことを、とても誇りに思うとともに、感謝したい。学校生活や課外活動など、伝えたいことはたくさんあるが、ここでは私がフィリピンの現実を実感させられた、考えさせられた出来事について述べたい。

フィリピンは、発展途上国であるため、貧富の差が非常に大きい。マカティなどでクラブやギャンブルを楽しんでいる裕福なフィリピン人がいる一方で、UPの大学内でさえ、裸足でお金を求めてきたり、サンパギータ（フィリピンの国花）を売っている子供に出会う。むしろ、そのような、いわゆるストリートチルドレンのほうが圧倒的に多い。そんなフィリピンでのとある出来事である。ジープニーに乗って移動中、30代であろう女性と出会った。彼女は片言の日本語で、「日本人ですか?」と話しかけてきた。そこから、彼女に子供がいること、若いときに日本で働いていたことなどをお聞きした。これも私がフィリピンを好きな理由のひとつ、初対面であってもフレンドリーになんでも隠さず素直に話してくれることだ。そんな時、彼女の携帯が鳴り、私に一言「死んだ。」と言った。私は理解ができず、聞き間違えかと耳を疑った。亡くなったのは彼女の6歳の息子。 Dengue熱と呼ばれる、蚊に刺されて発症する病気だったらしい。病院に通院するお金も、薬を買うお金もなく、日本では救えるはずの命が消えていった。私は何も言うことができなかった。ただ、さっきまで笑いながら話していた彼女の涙を見つめていた。この出来事は、非常に衝撃的で考えさせられ、印象に残っている。

この国はどうなってゆくのだろう、私たちには何ができるのだろう。と、日々考えさせられたが、未だに答えはでないのが現実だ。フィリピンに行く当初、私の考えはフェアトレード、NGOのボランティア団体などを発展させていくことだったが、実際にフィリピンで生活してみると、それとはいえなくなってしまうように思う。それらの活動はフィリピンにとって大きな力となっていくことは間違いない。しかし、留学後、私の考えは少し変わったように思う。うまく言い表せないが、現実という何かを学んできたように思う。

しかし私は、フィリピンという国が大好きになっ

て帰ってきた。非常に友好的な国民性も、焦ることなくゆっくり流れてゆく時間も。フィリピンには、まだまだ知られていない良い所がたくさんある。私はもっと多くの人に、フィリピンについて関心を持ち、知っていただきたい。

フィリピンで過ごした約7ヶ月、大きな壁に苦しんだときもあったが、それ以上に刺激的でぎっしりと重みのある充実した日々を過ごせた。また、人との出会いの中から違う視点、意見、考え方を知り、物事を多角的な視点から見つめることを学んだ。それらを教えてくれた「フィリピン」、多くの仲間、そして、この貴重な経験を与え、支えてくださった方々、大学、家族、友人に、心から感謝したい。この貴重な経験は、私にとってかけがえのない財産である。これらを将来に生かし、少しでも社会に貢献していきたい。



ジープニー



International Night (IC dormitory 企画イベント)



海外留学体験記 03

ーロシア モスクワ国立国際関係大学ー

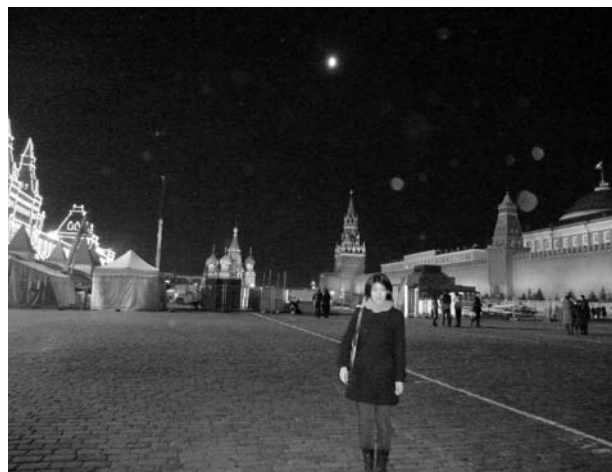
国際関係学部4年 西岡美紗代

私は、モスクワ国立国際関係大学に3ヶ月ほど留学しました。人生で初めて、たった一人で外国へ行くということで、多くの不安を抱えていました。実際、自分が“外国人”ということを感じ精神的に弱くなってしまうときもありましたが、同時に人のちょっとした“やさしさ”を、いつも以上にありがたと思ったことが印象的でした。

モスクワに到着した日、普段見慣れている日本の街並みとは程遠い風景に、少しカルチャーショックを受けました。そして、次の日が大変でした。大学内の、インターナショナル・オフィスという所へ行かなければならないのですが、警備が厳しく、証明書のようなものがないと大学内には入れません。そこで、近くにいた人に手当たり次第に英語で尋ねました。ロシア語は第二言語として専攻していましたが、正直それまで真剣には勉強してこなかったのが、全くロシア語が口から出てきません。私は以前京都駅で、外国人に「Can you speak English?」と尋ねられた時、なにも言えず黙って首を振り立ち去ってしまったことがあります。その時は、かわいそうだったかなと思いつつ、「ここは日本なのにいきなり英語で話しかけるなんて!」と思っていました。しかし、この時、私は近くのロシア人に自分が全く同じセリフを言っていることに気づきました。そこで初めて、当時の外国人の心境、また日本で困っている外国人の心境、ひいては外国の地でコミュニケーションができないつらさを身をもって理解しました。そしてこれから日本で困っている外国人はなるべく助けるべきだ!と強く思いました。

ロシア語に関しては、向上心の強い他の学生との交流が良い肥しになりました。ロシア留学の最大の目標は、ロシア語を少しでも向上させることだと考えていたので、寝る直前にラジオや音楽を聴いたり、辞書をたくさん引くということを意識したりしました。今の私のロシア語力は、まだまだ発展途上で正直ロシアにいた時と同じくらいのモチベーションを保つのは難しいですが、ロシア留学で一皮むけたことを確信しているので、このまま少しずつ勉強を続けていくことが大事だと思っています。

ロシア語だけでなく英語の必要性も再認識しました。寮で生活する上でルームメイトや他国の留学生との会話は英語が主で、とりわけ、はじめの1か月



赤の広場にて

は英語での会話が多かったためか、帰国後は、以前のような英語を話すことへの抵抗感がなくなり、英語学習はるかにやりやすくなりました。

また、日本語についても意識させられました。外国語を話す際に母国語の力も重要になってくることは、文献などで見聞きしたことはあるのですが、本当にその通りでした。英語でうまく説明できないとき、仮に日本語であってもこの説明をうまくできないことに気付いたことがあります。逆に、一概には言えませんが、日本語できちんと説明できると英訳も割と出来たりします。

たった3ヶ月でしたが、この留学を通じ他国の留学生との交流など日本では決して出会うことのできなかった人たちや話にふれることができたこと、また、ロシアと日本がいかに関係が近いかなど、ここで書ききれない貴重な経験ができました。これらは私の考えに多くの刺激を与えてくれたので、今後の自分の人生にも活かしていきたいです。



留学生スキー合宿

国際関係学部 3 年 ゲン・ミン・タン

私はベトナム人の留学生です。ベトナム南部に位置するホーチミン市の出身です。ホーチミン市では、気温は一年間ほとんど 30 度前後です。もちろん、雪を見たことはありません。雪といえば歌や映画の中のイメージです。日本に来て 4 年間経ちましたが、静岡では雪を見たことがありませんでした。

平成 23 年 2 月 18 日から 21 日まで、大学の企画で長野県の白馬へスキーに行きました。スキーは今回が初めてですが、上手に滑れるようになり、とても楽しかったです。

雪も初めて見ました。雪が降り始めたのはバスの中にいる時です。静岡から長野までの道に沿って、景色が何回も変わります。静岡は冬でも秋のような風景ですが、長野は雪で真っ白で、周りの雪の壁も高く、家も、車も、雪に埋もれていました。クリスマスケーキのお菓子の家に載せられる、美味しそうなクリームのように。これを見て感動しました。現地に着くと、雪を触りたい気持ちが強くなり、バスを降りて寒さも気にせず、T シャツのままで、すぐに雪のところに飛んでいきました。寒かったですが、スキーをやる気が沸いてきました。

スキー場に着くと、すぐ練習がはじまりました。この日は雪が強く降っていて、顔が冷たかったですが、先生方や周りの友達の情熱から勇気をもらいました。スキーは未経験の留学生が多かったのですが、大石先生達はとても親切に教えてくれました。グループに分け、一人一人に細かく指導をしてくださいました。そのため、未経験であっても、二日目には上手に滑れるようになりました。先生方の情熱に、心から感謝の気持ちでいっぱいです。

私は一つのいい思い出を作りました。私は『なごり雪』という歌が好きなのですが、そのことを知った先生が、私の緊張感をやわらげるために、このように言いました。「ミスター・タン、なごり雪を歌って、リラックス、リラックス!!」。これを聞き、本当にリラックスした

気持ちになり、スキー靴の下の雪を足の指で感じることができました。周りの仲間もこれを聞いて、「タン君、歌って！歌って！」とずっと冗談を言い合い、大笑いしました。私は「昨日よりずっと上手になった！さっきよりずっと上手になった！」と歌って応えました。

毎日、一日中スキーをしていました。夜は宿に戻って、美味しいご飯を食べました。この時間は、私にとって懐かしいものです。母国の家族は 20 人ほどの大家族です。毎週末、皆がお祖父さんの家に集まり、にぎやかです。日本に来てから、このような雰囲気は全くありませんでした。今回のスキー合宿のおかげで、ココロが暖まりました。夕飯は、とても美味しく感じました。

夕飯が終わると、皆が先生たちの部屋に集まって、一日の成果を語り、また先生からの指導をもらい、交流会、懇親会を盛り上げました。私は、『なごり雪』を歌いました。先生達がこのようなチャンスを与えてくださったおかげで、私、そして周りの仲間たちが幸せな時間を過ごすことができ、楽しくスキーをすることができました。

帰るときに、仲間が「名残惜しいね！」と言いました。そのとき、ココロがちょっと縮んでしまいました。確かに、離れたくないな！この場所。また皆と一緒にスキーをしながら、『なごり雪』を歌いたいな。。。



キナバル山紀行

ワンダーフォーゲル部 国際関係学部2年 渡辺高佑

この話が持ち上がったのは結構前のことである。小幡先生に講義の後に誘われた。マレーシアのキナバル山に登らないかということだった。登山経験も浅く、海外の山というのは不安だったが、この機会を逃したらもう二度と登る機会はないだろうと思い、後日承諾した。

キナバル山は標高 4,095 メートル、東南アジアでは最高峰の山である。3,000 メートル級になると高山病の危険性が出てくる。私は以前富士山に登った時、高山病を発症して頂上まで登れなかったことがある。今回の山は富士山よりも高いので、高山病の発症が一番の不安だった。

いよいよ 12 月 24 日（金）の登山当日、私と先輩と先生の 3 人でキナバル山に向かった。ワンダーフォーゲル部の普段の活動では、日本の山に週末を使って登ったり、アウトドア活動をしたりしているが、海外の山は初めてなので楽しみだった。コタキナバルからキナバル山までは車で 2 時間、行くまでは地元の人らしき人が 20 リンギット（約 600 円）で乗せてくれた。麓に到着し、手続きを済ませたら出発。今夜泊まる山小屋までは 6 キロ、所要時間は 6 時間だ。このキナバル山はかなり整備されており、富士山に登れば問題ない山と聞いていた。しかし、ずいぶんと辛かった。道が階段になっており最初の方は楽に登れたのだが、この段差が大きすぎる。5 キロを過ぎた辺りから登るのが辛くなってきた。少し登っては少し休み、少し登っては少し休みを繰り返しやっと山小屋にたどり着くことができた。山小屋はいくつかあり登山者は一番大きい山小屋で食事をする。この時点で富士山並みの高度だが、高山病の兆候はなかった。

自分達が泊まる山小屋はもう少し上に行ったところにある。そこに荷物を置き、着替えて暫くしたら夕食だ。山での食事と思えないような豪勢なもの

だった。山で肉が食べられるとは思わなかった。食事がすんだらすぐに引き上げて就寝だ。次の日は 2 時起き 3 時出発だ。山での朝は早い。

携帯の電池がなく目覚まし器が十分に機能しなかったが、2 時に起きることができた。少々頭痛がする。多少だが高山病の症状が出てきている。高山病にかかると頭痛や吐き気を催す。さらに悪化すると嘔吐する。最悪の場合は死に至ることもある。対処法としては速やかに下山するしかない。少しでも危険を感じたら下山するような決心が必要だ。朝食を済ませ必要な荷物だけ持ったら出発だ。外はまだ暗く、前日降った雨でぬかるんでいる。最初は順調だったが、いくらか進むと吐き気が出てきた。先輩に荷物を持ってもらいながら進んでいった。だが、山頂まであと少しというところで動けなくなってしまった。仕方がないのでここで夜明けを待った。マレーシアといっても山頂はかなり寒い。私はサバイバルシートにくるまって少しばかりだが眠った。

目を開けると既に太陽は昇っていて、そこにあったのは限りなく広がる雲海だった。ここまでのものは日本では見ることはまず出来ないだろう。そして雲海の上には昇ったばかりの太陽が輝いている。暫くこの光景に見とれていたが、不意に頂上までいけるような気がしてきた。一緒に来ていたガイドの人に荷物番を頼み再び登りだした。何故か頭痛も吐き気も治まっていた。岩だらけの道を、手を使い登っていく。5 分ほどで到着した。登った、登り切った。紆余曲折があったがたどり着くことができた。この時は嬉しかった。せつかく 9 割以上登ったのにここで引き返すのはあまりにも悔しい。何とかして頂上まで登りつめたかった。そして最後までやり通すことができた。頂上から見える景色は先ほどと大して変わらなかったが、それでも違って見えた。これが 4,095 メートルの景色であり、東南アジア最

高峰から見える景色である。感慨深かった。折れそうになりながらも登り切り、頂上に立つことができた。今までの山行の中では辛い部類に入るが、その分見返りも大きかった。日本では絶対に体験できない世界だ。これを味わえたのは素晴らしい。不安だらけだったが行って良かったと思っている。



麓からキナバル山を望む



ついに頂上へ。限りなく広がる雲海

第36回静岡駿府マラソンに参加して

食品栄養科学部4年 北村実穂



第36回静岡駿府マラソンが3月7日(日)に行われ、食品栄養科学部及び生活健康科学研究科から教職員、学生からなる有志28名が参加しました。

大会の1か月前から大学内の芝生公園を走る教職員や学生が増え始め、ジャージ姿で芝生公園で練習する先生方や友達の姿を見かけた私もそれに刺激されて、友達を誘い練習に励みました。

大会当日は若干寒さがありましたが、快晴で走りやすい天候であり、スタート場所である県庁前には道路を埋め尽くすほどの参加者が集まりました。今回、参加した有志はそれぞれ5km及び10kmのコースを選び、スタートの号砲が鳴ると各自これまでの練習成果を発揮すべく走り始めました。レースの中盤になると疲れが出始め、ペースが落ちましたが、木苗直秀学長をはじめとする沿道の方々の応援や、一緒に走っている友達と励まし合い、全員最後まで走り切ることができました。走り終わった後の全員の顔には若干疲れが見えるものの、普段、講義や研究等に追われ運動する機会が少ない我々には達成感が溢れ、清々しい顔をしていました。

今回、静岡駿府マラソンに先生方や先輩と参加することで教員学生間の交流を深めることができました。次大会にも是非積極的に参加し、さらに今後学内外で行われる各種イベントにも学部全体で積極的に参加していきたいと考えています。

大学準硬式野球連盟 中国遠征試合に参加して

国際関係学部4年 青木 克人



2月26日から5日間、東海選抜チームの一員として、中国の広州にて、野球を通じた交流をしてきました。中国に触れる中で、日本を再発見し、帰国後の自分の視野が広がったと感じています。サポートしてくださいました、関係者の皆様様に感謝いたします。人と人との関わり方、野球に対する考え方など、日本と「同じだな」と思う事から「違うのだな」と思う事まで、体験したことを簡単ではありますが報告いたします。

1. 違っていたストライクゾーン

中国で食べた「中華料理」は、これが本物だ！と言わんばかりのボリューム、味付け、油の量で日本における「中華料理」とは違っていました。油でギトギトの中国式中華料理を見て、中国語の「加油」が「頑張れ！」という意味だということを連想せざるを得ませんでした。次から次へと回転式のテーブルに並ぶ食事に「まだあるのか…」とつぶやく声が、「加油中華料理」が頑張って食べてと言っているかのようでした。食に対するストライクゾーンは日本と中国で全然違うようです。

2. 野球に対する想い

国境を越えても、言葉の壁があっても、野球に対する想いは同じでした。選手への激励や、好プレーへの拍手などは、中国でも見ることができました。審判が3人ではなく2人、試合が9回制ではなく7回制であることや、技術面での違いがありましたが、試合後に日本チームは「謝謝」、中国チームは「ありがとう」と、互いを認め合いました。野球に対する想いが、双方の心をつないだのではないのでしょうか。夜に行われた懇親会では、互いに注ぎあったり、「飲め」と煽ってみたり、このあたりはどこの国の大学生も似たり寄ったりでした。帰国後も、メールのやり取り（主に野球の話題）を続けています。野球に対する想いは国は違えど一緒であり、その想いがあるからこそ、言葉の壁を超えた心のキャッチボールができたと思っています。

3. 終わりに

“失敗しても挫けない！”これは、日本・中国の両チームに共通した姿勢でした。双方ともに、失敗をいつまでも悔やむのではなく、また、言い訳をするのではなく、次のチャンスを伺い挽回しようとしていました。おおげさに言えば、こういう気持ちを積み重ねる事が、その人の人生を変えうるのではないのでしょうか。かつてドイツのゲーテは、「Man errs so long as he strives.」（人間は努力する限り、過ちを犯すものだ。）と言いました。今もこの言葉は生きています。人生には失敗がつきものです。この遠征を含め大学で学んだことを糧に、失敗を恐れず様々なことに挑戦していきたいと考えています。

和気あいあい、食の自立をめざして 木苗学長発案・第1回「おとこの料理教室」

食品栄養科学部 フードマネジメント研究室
准教授 市川 陽子

2月23日(水)、「第1回おとこの料理教室」が食品栄養科学部棟内の調理実習室で開催されました。長年、本学のある谷田地区で民生委員として「生きる力」をつけるための支援活動を、幅広い層に向けて行っている、大石昭子さんの申し出を受けた木苗学長の発案によるものです。一人暮らし、単身赴任などで必要に迫られて、あるいは自分や家族の健康管理のために、食事づくりに挑戦したいと思いつながら、機会を逃してきた男性は少なくありません。今回は本学在籍の男子学生、男性教職員を対象に参加を呼びかけ、所属も年齢も様々な10名(うち女性3名)が参加しました。当日のメニューは、「あかねご飯(人参の炊き込みご飯)」、「豚肉のごぼう巻き」、レンジで作る「ブロッコリーのおかか和え」と「さつま芋バター」、「大根サラダ」「白菜と油揚げの味噌汁」、「利休白玉」と、簡単で見た目も栄養バランスも抜群のレシピ。参加者からは、「楽しかった。ぜひ第二弾を!」「意外と簡単。」「家ですぐにやってみます。」という感想が寄せられました。食品栄養科学部では、平成20年度に大学公開講座「おとこの食の自立を目指して」シリーズを開催し、男

性向け調理実習「男子厨房に入りましょう」を実施。また、食と健康に関する情報を発信する「食と健康Express」というサイトも公開しています。

(「食と健康Express」)

→<http://sfns.u-shizuoka-ken.ac.jp/express/>



薬学部カレッジホールにショーケースを寄贈

静薬学友会

1月13日(木)、本学大講堂にて開催された「第5回薬学講座」終了後に、薬学部及び薬学研究科の同窓会「静薬学友会」から薬学部へのショーケースの贈呈式が行われ、若尾直司会長より今井康之薬学研究科長へ目録が手渡されました。

この事業は、薬学部薬物動態学分野山田静雄教授のご協力により行われ、静薬学友会としても、費用の一部を「大学行事援助費」より支出いたしました。

ショーケースには、薬学部の歴史を語る品々(記

念誌、パネル写真など)や海外の大学と交換した記念品、楯、賞状などを展示する予定で準備を進めております。

昨年机と椅子の設置により、明るく一新したカレッジホール。木製ショーケースの設置により落ち着きが加わり、創立95年という長い歴史を持つ薬学部に対応しい格調高いホールになりました。皆さま是非一度カレッジホールへ足をお運びください。



若尾会長から今井薬学研究科長に
目録が手渡された



薬学部カレッジホールに
設置されたショーケース

ショーケースへの展示品について

各教室で保管されています、古い実験器具や記念品、資料などをお借りし順次展示していきたいと思っております。ご協力いただける場合は静薬学友会事務局までご連絡ください。

静薬学友会事務局(学生ホール2F)

TEL(054)265-8763

活躍する卒業生・修了生 情報伝達に情熱をこめて

2008年3月 大学院看護学研究科修士課程修了
シェア＝国際保健協力市民の会 虎頭 恭子

大学院終了後カンボジアの地を踏んでから早3年経ちます。1980年代まで続いた内紛により、多くの人々が命を亡くした国であることは皆さんもご存じのことと思います。カンボジアは現在、日本の高度成長期と同じほどの経済成長率で発展しつつあり、首都のプノンペンにはインターネットカフェがあちこちにあります。しかしながら、その恩恵を被っているのは一握りの人々です。農村地域では未だ電気も水道もなく、適切な知識があれば予防可能な病気で、多くの子どもたちが命を亡くしています。私は国際NGOスタッフとして、保健ボランティアと呼ばれる地域の人々と共に、自宅での適切なケアの提供と適切な時期に医療機関にかかることを啓蒙する活動を行っております。

修士課程では、静岡県東部に在住するペルー人の住民の方々の精神保健について研究を行い、日常の基本的な情報にもアクセスできていない多くの在日外国人の存在と、彼らに対応しようと尽力する公的機関の方々との間に溝があることを感じました。情報があふれている一方で、正しい情報が伝わるべき人に達するまでには様々な障害があるようです。また、情報発信者と受け手だけがつながるような、点と点をつなぐ手段では、さらに情報が届きにくくなっているようでした。

現在の仕事と研究を通して、どんなに様々な情報手段が発達しても、情報を伝えるのは人と人のつながりだと実感しております。更に、社会的弱者と呼ばれる人々へ情報を伝えるには、相手がどのような情報を必要としているのか汲み取る情熱と工夫が必要なのです。いかに正しい情報が伝わるか、受け手となる人だけでなくより多くの人を巻き込む形で、一つの手段だけでは頼らない情報伝達を心がける毎日です。

今回の東日本大震災はライフラインの断絶により、被災地ではテレビ・電話・インターネットといった通常の情報手段が一瞬にして使えなくなるという事態が起きました。一方、Twitter等で連絡を取り合い救助までつながった方もいらっしゃったようです。しかしながら、テレビではどの放送局でも専門家による批評ばかりで、誰を対象に情報発信しようとしているのかその質を疑いたくなる報道ばかりが流れていました。もっと、情熱と愛情をもった報道をしてほしいと切に願います。



子どもの栄養について村で保健教育を行うNGOスタッフ



離乳食の試食を楽しむ親子

活躍する卒業生・修了生 『楽しく看護する』

2004 年 4 月 看護学部卒業
岡山大学勤務 早瀬 良

私は現在、岡山大学医学部保健学科で助教をしています。主に、看護師・保健師を目指す学生に基礎看護学を教えています。基礎看護学は、看護学生としてまだほとんど何も出来ない1年生から、卒業までの4年間という長期に渡り、学生と直接関わることが出来ます。そのため、学生の成長を身近に感じることができ、非常にやりがいがありますが、どのような教育がより学生の成長を促すことができるのか、模索している日々です。

教育する上で、学生には『楽しく看護する』ことを1番に教えています。学部生時の自分の様々な病院や施設での看護臨床実習経験から、「医療チームの人間関係がいいほど、医療の質が高いのではないかと疑問を持ち、当時、看護学部准教授の西田公昭先生（現在、立正大学心理学部教授）の下で、看護を社会心理学から研究することの重要性と楽しさを学びました。そして、広島大学大学院総合科学研究科でその疑問に対する研究を続け、学部生時に自分が感じた感覚は正しかったことを実証し、博士（学術）を取得しました。岡山大学に着任してから、

同様の研究に取り組んでいます。病院や施設を利用する方は、心や体に何らかの訴えを抱えています。看護師が不健康であったり、医療チームの関係性が悪いと、利用者は訴えを表出しづらかったり、安心することは出来ないでしょう。私たち医療者は、その訴えを少しでも和らげることができるよう、自分自身がまず健康であり、チーム医療を提供する必要があります。そのためには、他の医療者に対して「同じチームの仲間」という意識を持ち、看護師が中心となって、医療者同士のコミュニケーションを十分にとり、楽しく仕事に取り組むことが大切になります。

静岡県立大学には看護学部だけではなく、他の学部も併設され、またその距離が非常に近いという大変素晴らしい環境があります。その環境を活かし、大きな視点で看護を捉え、『楽しく看護する』ことが出来るよう、学部生時に多くのことを学んでいただきたいと思います。今後、臨床の看護師・保健師・助産師や研究者となった多くの県大卒業生と出会えることを楽しみにしています。



岡山大学本学キャンパスの正門



現在勤務している医学部キャンパス

教員人事・客員教授の紹介

●教員人事（部局長等）

山田 静雄	理事兼副学長
富沢 壽男	副学長
奥 直人	薬学部長
大島 寛史	食品栄養科学部長
高柴 慎治	国際関係学部長
鈴木 直義	経営情報学部長
金澤 寛明	看護学部長
坂田 昌弘	環境科学研究所長
豊岡 利正	薬学研究科長
合田 敏尚	生活健康科学研究科長
武田 修一	国際関係学研究科長
奥村 昭博	経営情報イノベーション研究科長
中垣 紀子	看護学研究科長
野口 博司	附属図書館長
丹治 健一	学生部長
今井 康之	薬学部 副学部長
大橋 典男	食品栄養科学部 副学部長
寺尾 康	国際関係学部 副学部長
松浦 博	経営情報学部 副学部長
式守 晴子	看護学部 副学部長
国包 章一	環境科学研究所 副所長
小針 進	学生部副部長
渡邊 聡	学生部副部長（キャリア支援センター長）
熊谷 裕通	健康支援センター長
池田 哲夫	情報センター長
吉村 紀子	言語コミュニケーション研究センター長
中山 慶子	男女共同参画推進センター長
山田 浩	健康支援センター副センター長
デハーン ジョナサン	言語コミュニケーション研究センター副センター長
津富 宏	キャリア支援センター副センター長
犬塚 協太	男女共同参画推進センター副センター長
中山 勉	学長補佐（産学連携担当）
六鹿 茂夫	学長補佐（国際交流担当）
西田 在賢	学長補佐（社会人教育担当）
岩崎 邦彦	学長補佐（社会人教育担当）
菅 敏幸	学長補佐（広報担当）
若林 敬二	学長補佐（環境科学研究所将来構想担当）
室谷 哲	学長補佐（教務担当）

●採用

平成23年4月1日付		
野口 修治	薬学部薬学科	准教授
轟木堅一郎	薬学部薬学科	准教授
平川城太郎	薬学部薬学科	助 教
鰐淵 清史	薬学部薬学科	助 教
石内勘一郎	薬学部薬学科	特任助教
中沢 威人	薬学部薬学科	特任助教
島村 裕子	食品栄養科学部食品生命科学科	助 教
遠藤 香	食品栄養科学部栄養生命科学科	助 教
高畑 幸	国際関係学部国際関係学科	准教授
森 直香	国際関係学部国際言語文化学科	講 師
米山 優子	国際関係学部国際言語文化学科	講 師
奈倉 京子	国際関係学部国際言語文化学科	講 師
浦野 充洋	経営情報学部経営情報学科	助 教
原澤 純子	看護学部看護学科	助 教
小川 雅代	看護学部看護学科	助 教
村上 優子	看護学部看護学科	助 教
若林 敬二	環境科学研究所	教 授
藤森 敦之	言語コミュニケーション研究センター	特任助教
階戸 陽太	言語コミュニケーション研究センター	特任助教
平成23年5月1日付		
百成 香帆	看護学部看護学科	特任助教
平成23年6月1日付		
吉田 卓矢	食品栄養科学部栄養生命科学科	助 教
●昇任 平成23年4月1日付		
横山 英志	薬学部薬学科	講 師
前山 亮吉	国際関係学部国際関係学科	教 授
長瀬 久子	国際関係学部国際言語文化学科	教 授
佐藤真千子	国際関係学部国際関係学科	講 師
飯野 光浩	国際関係学部国際関係学科	講 師
上野 雄史	経営情報学部経営情報学科	講 師
河内 俊二	看護学部看護学科	講 師
●大学院兼務 平成23年4月1日付		
澤田 敬人	大学院国際関係学研究科	准教授

●退職

平成23年2月28日付		
杉山 靖正	食品栄養科学部食品生命科学科	助 教
平成23年3月31日付		
宮城島惇夫	薬学部薬学科	准教授
東 達也	薬学部薬学科	准教授
竹元万壽美	薬学部薬学科	准教授
稲垣 真輔	薬学部薬学科	講 師
植松 正吾	薬学部薬科学科	講 師
小黒 啓一	国際関係学部国際関係学科	教 授
榊 正子	国際関係学部国際言語文化学科	教 授
伊集 守直	経営情報学部経営情報学科	講 師
小寺 栄子	看護学部看護学科	教 授
西田 公昭	看護学部看護学科	准教授
石村佳代子	看護学部看護学科	講 師
井下 裕子	看護学部看護学科	助 教
平成23年4月30日付		
岡本きみ江	看護学部看護学科	助 教

平成23年3月卒業生 就職内定率98.9%(学部生)

キャリア支援センター

平成23年3月卒業生の就職状況は、リーマンショック以降厳しい雇用情勢が続く中、学部生の就職内定率は98.9%で、前年実績を1.4ポイント上回りました。全国の平均(91.1%)や県内大学の平均(86.9%)と比べても高い数値となっています。

大学院を含めた大学全体の就職内定率も98.4%と前年実績を0.5ポイント上回り、県大生の健闘が光る結果となりました。

●平成23年3月卒業生の就職状況(平成23年3月31日現在)

	薬学部	食品栄養科学部	国際関係学部	経営情報学部	看護学部	学部計	大学院	合計
就職内定率	100%	100%	98.2%	98.9%	100%	98.9%	97.3%	98.4%
(前年度)	100%	100%	95.5%	97.7%	100%	97.5%	98.6%	97.9%

●平成23年3月卒業生の主な就職先(平成23年3月31日現在)

薬学部 薬学研究科	アステラス製薬、大塚製薬、グラクソ・スミスクライン、大正製薬、第一三共、大日本住友製薬、中外製薬、万有製薬、久光製薬、国税局(国家I種)
食品栄養科学部 生活健康科学研究科	イチビキ、エスエスケイフーズ、オタフクソース、カルビー、テルモ、興和、ヤマサ醤油、静岡赤十字病院、静岡県立総合病院、東京都、静岡市
国際関係学部 国際関係学研究科	トヨタ自動車、中部電力、静岡鉄道、東海旅客鉄道、三井物産メタルズ、静岡銀行、三井生命保険、ジェイアール東海ツアーズ、静岡県教員
経営情報学部 経営情報学研究科	富士通、鈴与、静岡銀行、商工組合中央金庫、日本銀行、野村證券、東京海上日動火災保険、鈴与システムテクノロジー、静岡県、静岡県教員
看護学部 看護学研究科	静岡県立こども病院、静岡県立総合病院、静岡赤十字病院、聖隷浜松病院、東京大学医学部附属病院、名古屋大学医学部附属病院、静岡県、静岡市

キャリア支援センターでは、企業の採用活動の進行に合わせ、年間30種類程度のキャリア形成・就職支援講座を開催するとともに、専門のアドバイザーによる個別相談を実施するなど、きめ細かな支援を行っています。

はばたき寄金からのお知らせ

はばたき寄金運営委員会

1 はばたき寄金とは

豊かで明るく活力ある社会を構築するため、世界にはばたく人づくり事業や外国大学との交流事業、本学の学術・文化等の発展、向上に努めた人への顕彰事業などを行うために創立10周年を契機に創設された寄金です。

2 平成22年度はばたき寄金事業実績

(1) 奨学金の授与

モスクワ国立国際関係大学短期交換留学生の派遣学生2名と受入学生2名に奨学支援金を授与しました。

(2) 第13回学生スピーチコンテストの開催及び第14回学生文芸コンクール並びに創造力啓発コンテストの実施
台風の影響で予定を1日繰り下げ10月31日(日)に第13回学生スピーチコンテストを開催しました。また、第14回学生文芸コンクール及び創造力啓発コンテストの作品募集を行い(7月~10月)、スピーチコンテスト終了後入選者の表彰を行いました。

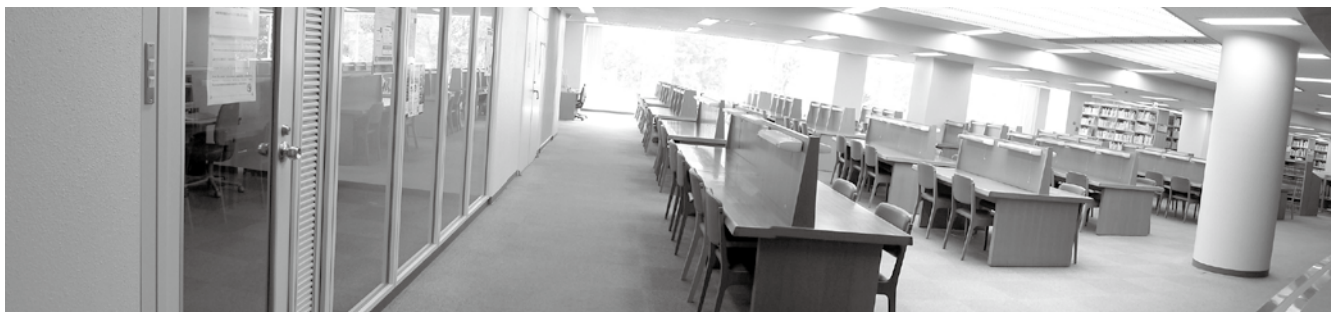
(3) はばたき賞の授与 平成22年度は該当者がありませんでした。

(4) おおとり会賞の授与 「静岡学生NGOあおい」を表彰しました。

3 平成22年度はばたき寄金収支結果

○収入計	12,639,167円	○支出計	1,415,570円
内 訳	8,776,144円 前年度繰越金	内 訳	1,252,000円 報奨等
	3,861,324円 寄附金等		160,000円 事業費助成(開学記念行事)
	(教職員、連合学友会、後援会等)		3,570円 雑費(賞状用紙代等)
	1,699円 雑収入(預貯金利息等)	○差引残高	11,223,597円 次年度繰越金

図書館だより



(写真は1階閲覧室です。館内改修による書架の配置移動のため、この広さで利用できるのは今年半ばまでとなります。)

「喜ばしき始まりに」

附属図書館館長 野口 博司

図書館とは、永らく貴重な図書と地図を何世代にもわたって受け継ぐべき貴重な財産として、保守管理するイメージがありました。

さて今日のように電子媒体資料が最新の情報供給源になってくると、その利用のかたちをみれば、一つ一つの研究室に図書館が入り込んでいるとも言えますし、学生のみなさんや教員一人一人が管理者だとも言えるでしょう。

それにともなう多くの院生や教員が情報入手のために図書館に足を運ぶ回数はどんどん減っています。

では現代の図書館の役割は何でしょうか。それは図書館を利用する人が閲覧室で誰にも干渉されず、自分の興の向くままに、そこを知的活動の場とするということです。そしてそれこそが本来の勉強のありようでしょう。各学部のカレッジホールは集うことができても、自分のお店を広げて何かするには手狭でしょう。大きな教室の電灯をつけて夜更けまで勉強している学生さんを見ることもありますが、電気代がもったいないものです。図書館は夜10時まで開いていて、エアコンも完備されています。机の幅や奥行きも教室の比ではありません。

自分一人でのときも、友達と一緒にのときも「お店」を広げていられる場所、として図書館はありたいのです。

今年図書館は新しく生まれ変わります。まず第一に居心地良く過ごしながら、読書や、情報検索、オーディオビジュアルを堪能できる場所を提供します。図書館のなかに、ラーニングコモンズをつくらうとしています。「授業」とは正に業を授かるという受け身の勉強です。しかし今度生まれる「空間」は、多様な目標や知的好奇心を持った、学生や市民が集いあい、自ら学習する場をその人たちの都合に合わせて再構築できるものです。これまでもこの図書館では、読書に格好の居心地のよい空調の効いた空間で、様々な電子媒体資料を利用しながら黙々と勉強し、国際的な資料のやりとりまでできる機能は備えていました。

しかし今年からは違います。利用する人が自分で使いやすいようにアレンジできる、さらに柔軟な空間を生みだそうと職員一同心を砕いて準備しています。

これまでの図書館の常識から想像を絶することの一つ言えば、図書館の中で声を出して議論ができる場を作りたいと画策しています。

皆さん一人一人が図書館をつくる主役です。使い方それぞれですが、アイデアを出して、みんなで新しい図書館を作っていきましょう。



野口館長の「喜ばしき始まりに」に添えて、図書館からの案内です。電子媒体や図書媒体の資料の利用の入り口で躓いたなら、カウンターのスタッフがいつでもお手伝いをします。年に2回図書館活用講座を開催しています。また、リクエストに応じていつでもオーダー講習会を行います。「ちょっと調べたいと思ったら、意外に操作が思いどおりにいかない。」「探している本が見当たらない。」、こんな時にいつでも気軽にカウンターに相談してください。

図書館利用が学生の皆さんの日常生活の一部になることを期待して、図書館も学生の皆さんとともに歩みを進めていきたいと思っています。

3階 LEARNING COMMONS 知の展開

3階閲覧室:組み合わせて使える椅子や机を置いて自由なグループ学習ができるコーナーになります。また、プレゼンテーションや研究発表ができる設備を用意します。



ANNIVERSARY
開学25周年
この記念の年に
図書館が
変わります!



2階 EXPLORING HALL 知の探求

AVライブラリーは1Fに移設し、自由閲覧室とともに個人学習コーナーになります。
25周年を記念して2階階段回りに本学資料コーナーが新設されます。



※写真は現在の図書館の様子です

1階 Info Cafe 知の収集技法

参考図書書を移動した広い空間はPCコーナー・雑誌コーナーに、学術情報検索室は多目的のルームになります。休憩室は飲食ができるようになります。

本学先生からの寄贈著書

2010年12月3日から2011年4月12日までの先生方からの寄贈著作資料は次のとおりです。(受入順)

長瀬 久子先生 (国際関係学部)		
『ギャスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化: 生誕二百年記念』 松岡光治 編 「同時代作家: ギャスケルとの交流を通して」長瀬 久子 著 溪水社		(930.28/G25)
国包 章一先生 (環境科学研究所)		
『自然と共生した流域圏・都市の再生: 流域圏から都市・地域環境の再生を考える』 「自然共生化技術開発」国包 章一 著 技法堂出版		(518.8/Sh93)
津富 宏先生 (国際関係学部)		
『セカンドチャンス!: 人生が変わった少年院出院者たち』セカンドチャンス! 編 「セカンドチャンス!の始まり」「海外の先進例に学ぶ」津富 宏 著 新科学出版社		(327.85/Se22)
富沢 寿勇副学長 玉置 泰明先生 湖中 真哉先生 (国際関係学部)		
『平成21年度フィールドワーク実習報告書 静岡県周智郡森町』富沢寿勇[ほか]共編 [本学本学部国際行動学コース]刊行		(382.154/Sh94)
木苗 直秀学長		
『地球環境学事典』総合地球環境学研究所 編 「医薬としての漢方と認証制度」木苗 直秀 著 弘文堂		(519.03/So28)

シリーズ 私の1冊の本

このコーナーでは、先生方がこれまでに読んで感銘を受けた本や印象に残っている本を紹介しています。紹介される本は専門分野に関連した興味深い本のほか、専門とは全く離れたジャンルの本のこともあります。講義のときは一味違う切り口による専門分野の解説や思いがけない趣味や人生体験の披露などにこれまで近寄りがたかった先生が少し身近に感じられるかもしれません。ここで紹介する本は、図書館で受け入れていますので、是非一度この機会に手にしてみてください。

経営情報学部 助教 国保祥子

紹介図書名：『ハーバードからの贈り物』

著 者 名：デージー・ウェイドマン／著

出版社名：武田ランダムハウスジャパン

I S B N：978-4-270-00035-9

図書館所蔵：閲覧室1階 159/W12



私は経営学の研究者として、マネジメント（経営）という感覚が一般的でないところに、マネジメントを適用する研究をしています。元々マネジメントとは、効率的な目的達成のために開発されてきたツールであり、利益最大化を目的とするケースが多いものの、非営利組織がより効率的な運営を行う行動もマネジメントです。その中で、マネジメントを行うリーダーのよしあしで組織が幸せになったり不幸せになったりするのを見てきました。そのため現場を統括するリーダーに適切なマネジメントの研究と教育を行うことで、生き生きと働く現場の人を増やしていきたいと考えています。

ところで「リーダー」というと、多くの人には組織のトップではない自分には無縁だと考えがちです。しかしリーダーとは、リーダーシップを発揮する人のことであり、リーダーシップとは影響力のことです。役職に関わらず、影響力をうまく行使することで誰もがリーダーとなる要素は持っています。そしてリーダーシップに関する私の座右の書が、この本です。ハーバード・ビジネススクールでは、講義の最後の1コマを使って、学生すなわち未来のリーダーに向けて教授陣が訓話を贈る慣習があり、本書はその訓話を収録したものです。これから社会に羽ばたいてゆく教え子たちに、ビジネスやアカデミックのフィールドで多くの実績を積んだ教授陣が、自らの経験に基づいたエピソードを添えて、「自分はどのようなリーダーでありたいのか」を考えるきっかけを与えています。

私は、目指すところが分からずに迷いの多かった20代の頃に本書と出会いました。自分がリーダーに値するとは思っていませんでしたが、社会とどのように関わっていききたいかの指針をこの本にもらいました。本書には15の訓話がありますが、面白いことに自分の状態によって心に響く章が異なります。以前は理解できなかった章が後日読むと腑に落ちることも多く、いつしか自分の成長の定点観測としてこの本を開くようになりました。例えば、大学院修士課程でこれからのキャリアに迷っていたときは、自らに与えられた幸運を認識する重要性とそれに伴う責任について、九死に一生を得た登山での滑落事故の経験から語った『転落から高みへ』が、理想の姿と現実の不甲斐ない自分とのギャップに苦しんでいたときには、著名なリーダーも不完全であったことを語る『完璧を求めるな』が心に残りました。

他にも、元民間企業CEOの教授が権力と地位を持った自分の影響力を正しく認識していなかったことで愚かな指示をしたという自らの失敗談を添えて語る『まずい食事と真実』、経営者の決断で人生を変えられる従業員は誰かの父親や母親・息子や娘であることを忘れるなど、そのような従業員の一人であった母親に育てられた教授が語る『サラの物語』、故障によってバスケットボール選手生命を絶たれ、アクシデントの結果としてなった大学教員に天職を見出した教授が、今ここで経験していることには終わりがあることを意識し大切にしないと語る『今という瞬間を生きよ』、不条理な試験の思い出とともに、正解を当てることより限られた情報の中で持てる知識を使ってロジックを組み立てて仮説を立てる経験のほうが実社会では大事だと語る『剥製の鳥』、従業員が貴方のために働くのは権力を持っているからではなくいい将来へ導いてくれると信じるからだと心理学者の教授が語る『なぜ人はあなたのために働くのか』、などの印象的な物語が本書には載っています。

なおこの原稿を書くために久しぶりに読み直しましたが、今の自分に響いたのは最終章の『自分を見失うな』でした。その教授は自分を見失うことなく高みを目指し続けることの重要性を両親から教わりましたが、その両親と同じく「貴方を信じている、貴方なら出来る」というメッセージを学生に送り続けることが、大学教員の仕事だと考えています。

東日本大震災の被災地支援に向けて

3月11日に発生した東日本大震災により被災された多くの皆様に謹んでお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。

発災後、本学の学生および教職員は様々なかたちで被災地支援活動を行っています。今後さらに、本学としてできること、被災地の皆様が必要とされている支援を、積極的に遂行したいと考えています。

静岡県立大学学長 木苗直秀

東北地方出身者の集まりが開かれる —大震災に対する思いなどを語る—

学生部副部長 小針進

4月15日、東北6県（青森、秋田、岩手、宮城、山形、福島）にゆかりのある学部生・院生と教職員が懇談する集まりがありました。文系・理系を問わず20名程度の学部生・院生と4名の教員が出席し、東日本大震災の話などを中心に語り合いました。

この集まりは、「出身地別による親睦の集まりが本学であっていい。手始めに東北地方出身者で集ってみたい。大震災についても語りたい」と小幡壮・国際関係学部教授（岩手県一関市出身）が主宰し、学生部が呼びかけなどに協力しました。

初めての集まりだったので出席者各自は自己紹介から始まり、その後、大震災への思いを率直に語りました。「親・きょうだい・親戚・友人が被災している」「風評被害が深刻だ」「故郷と静岡では様々なギャップがある」といった現状報告のほか、「現場はひどくて言葉にならない」「自分だけ大学生活を送っていて申し訳ない」「心が痛い」などの切実な声も多く出されました。「他人事ではないから」と出席した他の地方出身者の姿も見えました。

このような集まりに意義を感じた出席者は多く、5月20日にも被災地でのボランティア活動に関する報告会が開かれました。これからも月に1度程度学生が音頭を取る形で続けることにな

りました。関心のある方は、下記までお問合せください。

学生部の調べによれば、4月末現在、東北6県の出身者（学部生・院生）は111名（うち新入生30名）で、太平洋側の3県（岩手・宮城・福島）だけに限ると59名（うち新入生17名）が在学しています。一方、この3県以外で大震災の被災が大きかった関東地方の茨城県出身者は27名（うち新入生8名）になります。

小幡教授は「今後は学部ごとと同じ出身地の教員と学生が集まる機会を持つては」と述べています。

お問合せ先／国際関係学部 小幡研究室

（国際関係学部棟3408室）

TEL : 054-264-5348

E-mail : obata@u-shizuoka-ken.ac.jp



東日本大震災被災地支援緊急報告会

4月26日(火)、谷田キャンパス看護学部棟にて、東日本大震災の被災地支援に取り組んだ教員と学生による活動報告会が開かれ、約170人が来場しました。

岩手県でインターネットなどの通信環境の構築作業を行った経営情報学部の湯瀬裕准教授をはじめ、薬学部の林秀樹講師は宮城県石巻市や女川町での調剤や被災者からの薬の相談対応などの医療支援について報告しました。学生においては、学生防災ボランティアグループ「防z(ボウズ)」のメンバーの皆さんが街頭募金活動を報告し、短期大学部からは、社会福祉学科の江原勝幸准教授が、避難所の子どもたちとHPS(ホスピタル・プレイ・スペシャリスト)の遊びを通じた活動を報告しました。実際に被災地で配ったおもちゃのサンプルも会場に回り、子どもにとっての遊びの必要性を訴えました。



ボランティアグループ「防z(ボウズ)」



江原勝幸准教授



報告会会場の様子



湯瀬准教授の大槌町災害対策本部に衛星インターネットの設置作業



林秀樹講師



被災地で配ったおもちゃのサンプル

県大生ピックアップ！ Interview

山本晃史さん(20)

国際関係学部3年
愛知県出身

東日本大震災の被災者支援を目的として、山本さんの呼びかけにより、県大生を中心とした学生有志による街頭募金活動が3月から4月にかけて行われ、総額450万円に及ぶ支援募金が寄附されました。

—今回募金活動をしたと思ったきっかけは？

当日は熱海で地震に遭いました。それほど大きく揺れなかったのですが、電車が運休になり、知人の宿へ泊まりました。後からニュースを見て被害の大きさに驚きました。被災地の方々を思うと自分の置かれた状況が恵まれていると感じましたし、何かしなくてはという気持ちになりました。翌日帰る電車の中で、Twitterやメールで学内の仲間に募金活動と呼び掛けると10人程来てくれました。予想していた募金金額をはるかに超えたことにも驚きました。

—活動を通して何か得るものはありましたか

これからの社会を担っていく僕たちの世代が、この震災をきっかけに頑張らなければならないようになりました。県大には活発に活動しているボランティア



団体があるので自然に興味を持つようになりました。今回の活動のように、活動の輪が学内、そして更には県内の学生へと広まり、つながった若者たちが社会の力になれば良いと思います。この大学に入学していなかったら今回の震災についても深く考えたり行動することはなかったかもしれません。大学に入って自分が変わったと思います。

—今後の活動は？

募金活動とは別にYEC(若者エンパワメント委員会)の活動をしているので、僕らの世代が「やりたい」と思ったことをできるように後押ししていきたいです。

静岡県立美術館から展覧会のお知らせ Information

「今最も注目を集める現代美術作家の作品が来静!」

今、最も注目を集める現代美術作家の一人、小谷元彦。彼は、「痛み」「恐怖」「生と死」など目には見えないモノを、彫刻という表現方法を用いて知覚化を試みてきました。そんな彼の幻想的で不可思議な世界に、是非足を踏み入れてみてください。きっとあなたの中にも潜む色々な感覚が呼びさまされるはず…。

『小谷元彦展 幽体の知覚』 大学生以下無料

開催期間：5/28(土)～7/10(日)

開館時間：午前10時～午後5時30分(入室は午後5時まで) 休館日：毎週月曜日

〈次回展覧会〉

『芸術の花開く都市展 -パリ、ローマ、東京、京都。その都市でしか生まれない芸術-』7/19(火)～9/8(木)



《Ruffle (Dress04)》2009-10年

ニュース&トピックスを公式サイトへ！

教職員・学生の皆様の受賞、研究成果の発表、学会・研究集会の案内、クラブ・サークルへのご掲載をお願いします。公式サイト学内専用情報「公式サイトにイベントとニュースを掲載する方法」をご覧ください。

●本学公式サイト URL

<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

はばたきへのご意見をお待ちしております。

お問合せ先

静岡県立大学事務局広報室(はばたき棟2階)

TEL: 054-264-5130 FAX: 054-264-5099

E-mail: koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

〒422-8526 静岡市駿河区谷田5-2-2

発行：広報委員会